ユニバーサルデザインの授業を追究する

～ 授業力向上のアプローチとして ～

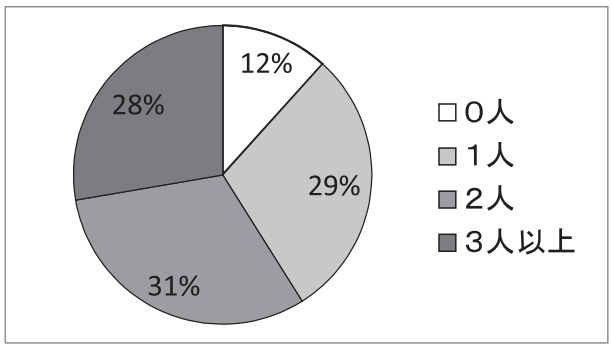
相模原市立若草小学校　**大里　朝彦**

Ⅰ　はじめに

現行学習指導要領の理念は、「生きる力」の育成である。その中で「基礎的・基本的な知識技術の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」等が重視されている。これらの確かな学力は日々の授業で培われる力である。まさに今、その力を付けていくための授業の構築が求められている。

一方、文部科学省の調査（平成２４年度）によれば、小・中学校には、知的発達の遅れはないものの通常の学級における特別な教育的支援を必要とする児童生徒が約６．５％いるという結果が出されている。

そのことを裏付けるように、昨年度に神奈川県公立小学校長会が行った調査でも、次のグラフのように、約９割の学校で１学級あたり指導者が個別的に関わる子どもが１人以上在籍しているということがわかっている。



このように配慮を必要としている子どもも含めて、どの子にも「わかりやすい授業・学びやすい授業」を行うことが重要であり、昨今、それを具現化する理論として「ユニバーサルデザインの授業」が普及しつつある。

授業力の向上は教師自身の目標であり、管理職としての切なる願いでもある。子どもたち全員に「わかった・できた」と実感させ、学力向上が期待できるユニバーサルデザインの授業を広め、日常化につなげるために、これまで校長として取り組んできた実践研究について報告する。

Ⅱ　ユニバーサルデザインの授業とは

１　ユニバーサルデザインの授業が広まってきた背景

平成２５年１２月４日の参議院本会議で、「障害者の権利に関する条約の批准」が承認された。２００６年に国際連合で採択され、既に１３８カ国が批准していた条約であり、遅まきながら日本も批准したのである。

日本の批准が遅れたのは、国内法が条約で求める水準に比べてあまりにも低く、諸法の改正をしなければならなかったからである。平成２３年には「障害者基本法」が改正され、平成２５年春の通常国会では「障害者差別解消法」が成立するなどして、ようやく国内環境が整い批准に至ったのである。

平成１９年度の特別支援教育の制度化も、その一環であると考える。制度化された特別支援教育の目指すところは、インクルーシブな社会形成である。すなわち障害のある人とない人を分けて考えるのではなく、一緒に生きる共生社会の実現である。

平成２４年７月に文部科学省は、「共生社

会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」をまとめた。そこには、「共生社会の形成に向けて、障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のため、特別支援教育を着実に進めていく必要があると考える。」と明記されている。

まさに、共生社会を実現するために、義務教育段階から障害を特別なものとしてとらえない考え方を広め、障害のある児童生徒と共に学ぶことを基本にしているのである。前述したように、通常の学級には特別な教育的支援を必要とする児童生徒が約６．５％いる。

障害のある子どもへの個別の支援だけではなく、学級全体を視野に入れたスクールワイドの支援の必要性が高くなってきた中で､「ユニバーサルデザインの授業」が広まってきていると考える。

２　ユニバーサルデザインの考え方

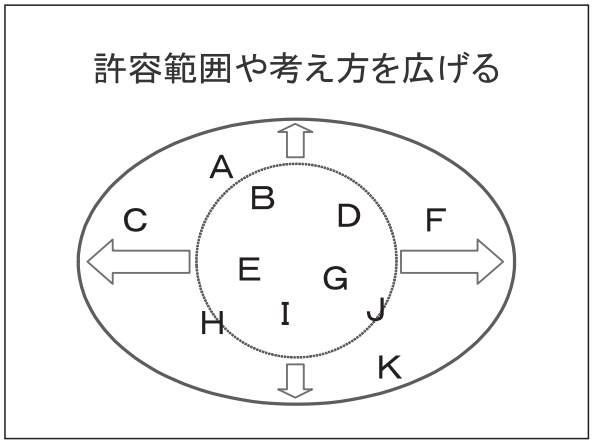
「ユニバーサルデザイン」というのは、年齢や障害の有無にかかわらず、すべての人にとって使いやすいように開発された製品や情報、環境の設計（デザイン）のことである。「バリアフリー」が特別な人のために、障害を取り除くことを目的としたことに対して、最初から「誰でも」を対象にした考え方である。アメリカの建築家であった故ロナルド・メイス氏（1941-1998）が提唱したもので、次の７原則がある。

１．どんな人でも公平に利用できる
２．使う上で自由度が高い
３．使い方が簡単で、すぐにわかる
４．必要な情報がすぐにわかる
５．うっかりミスや危険につながらない
６．身体への負担がかかりづらい
７．スペースや大きさが確保できアクセスしやすい

３　ユニバーサルデザインの授業の定義

前述の７原則の中の、特に「どんな人でも」「簡単に」「わかる」という考え方を授業設計に活かした考え方が、「ユニバサールデザインの授業」とか「授業のユニバーサルデザイン」といわれるもので、具体的にはいろいろな定義がされている。

植草学園短期大学の佐藤慎二教授は、通常学級の授業づくりにおける「ユニバーサルデザイン」を著書の中で、「ＬＤ等の子どもには，『ないと困る』支援であり，どの子どもにも『あると便利』な支援を増やす」と説いている。つまりＬＤ等の子どもたちへの特別な支援を行うのではなく、どの子にもよりよい支援を授業の中で実現する志向性を「ユニバーサルデザイン」と押さえている。



また、新潟大学の長澤正樹教授は、「学習のユニバーサルデザイン」を「すべての学習者が、学習に対する知識、技能、やる気を得ることを可能にするカリキュラムを設定するための枠組み」ととらえている。

さらに、国立特別支援教育総合研究所の小林倫代上席総括研究員は、「学習のユニバーサルデザインの三原則」を、①多様な提示方法を使用する、②多様な表現方法の使用を認める、③課題に取り組み続けるための多様な方法を使用する、としている。

現在、全国的に最も広がりのある筑波大学附属小学校の桂聖教諭が中心となって活動している｢授業のユニバーサルデザイン研究会」

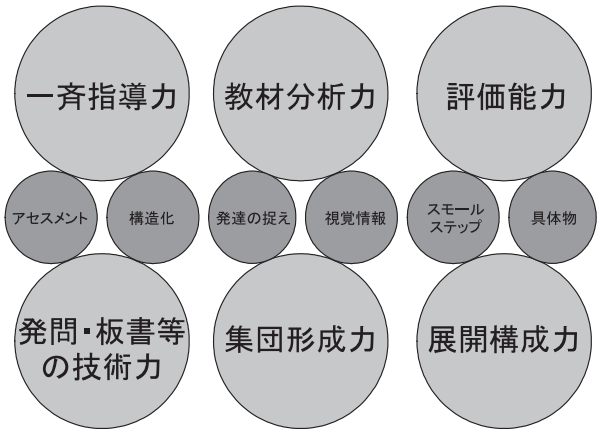
は、授業のユニバーサルデザインを「学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、全員の子どもが楽しく『わかる・できる』ように工夫・配慮された通常の学級における授業デザイン」と定義している。そして文中にある「工夫」を教科教育からの授業改善に向けたアプローチ、「配慮」を特別支援教育からの個々のニーズに応じた配慮事項のアプローチとして、具体的な研究を進めている。特に授業づくりの工夫として、

「授業を焦点化（シンプルに）する」
「授業を視覚化（ビジュアルに）する」
「授業を共有化（シェア）する」
の３つを提唱している。

「焦点化」でねらいや活動をしぼり、「視覚化」で視覚的な理解を重視し、「共有化」で一人の考えのよさが他の子たちに分かち伝わるようにするということである。この考え方は非常にわかりやすく、自分も先生方の授業を分析する際の視点としている。

4　自分が提唱している考え

前述のような考え方を学んだり、自分が特別支援教育に携わってきたりした経験から、自分で提唱しているユニバーサルデザインの授業についての考えが、次の図である。



これまで行われてきた「わかる・できる」ための授業力に、特別支援教育のノウハウを加味したものであるという考えである。

「研究集団ことのは」代表の堀裕嗣氏（札幌市立中学校教諭）は、一斉授業を機能させる視点として、「机間指導」「発言指導」「小集団交流」「ノート指導」「評価評定」「授業構成」等をあげている。一人の教師が一度に大人数の子どもに指導する「一斉授業」には、このように集団であることを踏まえた展開要素が多数あり、それらを駆使した授業力が求められている。

一方、特別支援学校や特別支援学級の授業は、理解や定着に課題を持っている子どもに教えるだけに一斉授業とは異なる特性を持っている。小集団の形態をとることもあるが、個別対応が基本であり、一人一人の子どもの能力や特性に視点が当てられ、個を見取る眼や個に対応する力が必要となってくる。

そこで、一斉授業を展開する授業力に、特別支援教育で大事にされている「アセスメント」「発達の捉え」「構造化」「視覚情報」「スモールステップ」「具体物」等の要素を意図的・計画的に盛り込むことで、誰もがわかりやすい授業が可能になると考えている。

アセスメントとは、今後の教育活動を円滑に進めるための組み立てや見通しをもつことであり、具体的には、実態把握→実態分析→方針決定→指導計画という流れになる。

発達の捉えとは、例えば鉛筆を正しく持てるようになるためには、スプーンを握って持つ段階を経るというような発達の順序性を踏まえることである。教科の系統性も、その考え方に基づいて設定されている。

構造化は、そこに関わる要素間の関係性を明らかにして、全体の仕組み（構造）をわかりやすくすることである。構造化には次のようなものが考えられる。

・物理的構造化（どこで、何をする）
・時間の構造化（いつ、何をする）
・ワークシステム（何を、どれだけする）
・手順の構造化（何を、どのようにする）
・ルーティン化（～したら、次は～）

一般的に、人の情報入手の手段と理解の関係性を見ると、視覚情報が一番であることが実証されている。また、子どもほど視覚優位である。一目瞭然という言葉もあるように、視覚的な情報を効果的に活用することが重要である。

スモールステップとは、目標を細かく設定して、達成しやすくするための概念である。例えば、離席行動が激しい子どもに「授業中は座っている」という目標を設定しても、現実的ではない。そこで「５分間だけ」という達成可能な目標を設定し、それが定着したら次の目標を設定するということである。

具体物を見たり触ったりする行動は、理解に直結する。人がものやことを理解する順序として､具体物から抽象物という流れがある。実物→立体模型→写真→写実的な絵→イラスト→マークという順序であり、その中で名称や特性も理解していく。

Ⅲ　実践の概要

１　研修会･研究会での講演･助言

⑴ 自校の研修会･研究会

校長として３校を経験しているが、どの学校でも、学校経営の基盤に支援教育の理念を置くようにしているので、必然的に職員には支援教育についての話をしている。中でも夏季休業中に行われる校内研修や、日常的に行われている校内研究の場では、講師として支援教育やユニバーサルデザインの授業について話す機会を設けている。

H20.8.21　富士見小　夏期校内研修会
「支援教育を考える」
H21.8.29　富士見小　夏期校内研修会
「支援教育を考える PartⅡ」
H22.10.27　田名小　校内研究全体会
「支援教育の考えを活かした授業づくり」
H24.7.30　田名小　夏期校内研修会
「ユニバーサルデザインによる授業とは」
H24.8.29　田名小　校内研修全体会
「一般的な授業 VS
　　ユニバーサルデザインの授業」
H25.8.30　若草小　夏期研修会
「チャレンジ、支援教育！」

話のポイントは、通常の学級で普段行っている授業に特別支援教育のノウハウを意図的に組み込んでいくことが重要であるということである。

校内で行った研修会の中でも、H24.8.29 に行った研修会では、２年生の国語「お手紙」の授業を、一般的に行われている展開とユニバーサルデザインの手法を意図的に組み入れた展開を企画し、演習として実施した。

研究主任と副主任の二人が、それぞれの教師役、研究推進委員が発言する子ども役、他の教員は発言しない子どもの役となり、実際に授業のロールプレイを行った。そして、両方の授業を比べてながら授業のポイントとなるところで自分が解説をして、展開の工夫等を伝えるようにした。

＜解説している場面＞

参加した先生方にとっては、これまで得た情報からユニバーサルデザインの授業についての自分なりのイメージを持っていたが、実際の授業のシーンを見ることで、そのイメージがより確かなものとなり、主体的に取り入れる契機となったと捉えている。

⑵ 学校外の要請に応じて

校長になって７年目を迎えているが、この間に、教育関係者や他団体からの依頼を受けて研究会や講演会で話したり、本や雑誌等に執筆したりしてきた。話したり書いたりする際にはそのときの学校や子どもの実態を踏まえての提案とすることや、支援教育の理解の周知・実践の拡充等の願いを込めて行っている。最近のものとしては、次のようである。

H25.6.30　相模原市立小学校教頭会
「授業のユニバーサルデザインの
研修会の進め方」
H25.7.17　座間市立立野台小学校夏期研修会
「学級における発達障害への対応と指導 」
H26.1.11　相模原教育を創る会
「ユニバーサルデザインから
授業をつくっていこう」
H26.1.27　川崎市立小学校長会
「学校経営における特別支援
教育体制の構築」

２　校長室だよりでの紹介

校長になってから毎年度、「校長室だより（Prin. a la mode）」を作成し教職員等に配付している。紙面は、学校経営や学校運営に関する校長の思いや考え、教育界の動向や地域の現状を主としている。「ユニバーサルデザインの授業」に関しても、自分が参加してきた研究会や研修会の報告、予定されている研究発表会や授業公開のお知らせ、参考図書の紹介等を行っている。それ以外にも、時期に応じたシリーズ記事も設定している。

特に、授業力の向上への願いを込めて、これまでもユニバーサルデザインの授業に関するシリーズは何回か掲載してきた。

H21.1.14～2.27（全６回）「授業改善」
H22.12.7～H23.3.22（全１０回）
「授業改善を考える」
H23.4.28～7.20（全７回）
「ＵＤ授業ワンポイント・アドバイス」
H24.1.27～7.4（全１４回）
「再び、ユニバーサルデザインの授業」

３　授業参観後の指導

授業力向上は教師自身の目標であり、校長の願いでもある。教師は、少しでも子どもが「わかる・できる」ことに向けて、授業に力を注いでいる。さらに、より良い授業の構築に向けて、校内研究で授業研究を積み重ね、相互の力量を高めようとしている。

その一環として、校長として授業を参観し指導・助言を行っている。その際には、Ａ４版１枚の「授業参観メモ」を作成し、それをもとに参観後に協議を行っている。

授業参観メモには、その授業を通して見られたことや気付いたことを、項目立てをして書くようにしている。そして、「ユニバーサルデザインの授業の視点から」という項目を設け、参観した教科以外にも通用する「わかる・できる」ための手立てを記している。

どの子にとっても「わかりやすい授業」になっているときには、授業者が意識していなくても、ユニバーサルデザインの手立てが図られている場合も多い。そこで、あえてそこを取り上げて、ユニバーサルデザインの手法になっていることを指摘することで、教師は自信を持ち、他でも転用しようとするようになる。

今年度になってからは、そのユニバーサルデザインの授業の視点に、「授業のユニバーサルデザイン研究会」が提唱している「焦点化・視覚化・共有化」の３つを応用することで、先生方のユニバーサルデザインの授業に対するイメージが明確になっていっているように思われる。

【ユニバーサルデザインの授業づくりの視点から】

●授業の焦点化（シンプルに）	○学習活動の全てが、がまくんとかえるくんが手紙が来るのを幸せな気持ちで待っている理由とそのときの様子を読み取ることを促すために設定されている。 ○本時でかえるくんに対するがまくんの気持ちを端的に表している文は「ああ。」である。この「ああ」は、「ものに感じて発する声」であり感動を表す言葉であり、記号をつければ「！」である。 それを丁寧に扱うことで、がまくんの心情の読み取りが可能である。 また、第３時でがまくんが言っている「ああ。」と比較させることで、気持ちの変化のとらえが容易になる。 例えば、「この前の『ああ。』とどこが違うの」という発問で、子どもは本場面だけでなく、物語全体をつかんだ深い読み取りが可能なる。
●授業の視覚化（ビジュアルに）	○黒板には余計な刺激物がなく、全体的には理解を促すための視覚的な工夫がなされていて、課題を追究しやすい学習環境となっている。 ○単元全体の流れ、前時までの学習の足跡などが見やすく提示され、授業で活用されている。 ○特に子どもに配付したワークシートの拡大版が用意されていてたことで、細々した指示をしなくても子どもは理解し活動していた。 （ex.先生が板書すると視写する、吹き出しを間違えないで書く） ○がまくんとかえるくんの気持ちを板書したが、それを確認したり、それを次につなげる展開はなかった。子どもの考えを発表する方法の一つとして、机間指導の間に発表させたい子に吹き出し方の画用紙を渡して書かせ、それを貼っていくのも良い。
●授業の共有化（シェアする）	○課題が明確なこと、ペア活動を取り入れることで、全体として子どもたちが思考過程を共有することができていた。 ○最初の動作化を取り入れることで、寄り添うという心情を体感させることができていた。また、そこを丁寧に扱ったことで、殆どの子がワークシートへの記入ができていた。 ○二回目の動作化（気持ちを考えてワークシートに書いた後）も、やりとりの中で、幸せな気持ちを体感させることにつながっている。 ○しかし最後の３組の代表のペアによる動作化は、前二つに比べると設定理由が弱いように感じる。「こういう考えもあるのか」程度であり、最後に持ってきたことで見る側の意識や集中力は欠けていた。二回目のモデル化として、もっと前に設定すると有効であった。 ○全体的には、どの子どもたちも本時のめあて（がまくんとかえるくんの言動や手紙から、二人の幸せな様子を読み取ることができる）が達成できたような感を受けるが、多分に雰囲気的なものである。 しかし、それが本当に子どもの理解の定着につながっているかどうかは不明である。読み取りで大事なことは、文中に出てくる言葉や文に帰結し、論理的に読み深めることが大切である。 例えば、子どもがワークシートに書いた言葉から「幸せ」「うれしい」「ありがたい」「親友」等の言葉をキーワードとして取り上げ、それが入っていれば確認する、なければその言葉を使って書き足す等の活動を通して、心情を「共通な言葉」で表し、内容の共通理解を図るのも一つの方法である。

＜３つの視点で書いたメモ＞

また、それぞれの先生方の授業参観メモの「ユニバーサルデザインの授業の視点から」という項目に記入した内容を項目別にまとめ、全教員に配付することで共有化を図れるようにした。誰でもすぐに利用できる一例をあげてみる。

□学習環境
・黒板に刺激となる余計なものがない。
・話を聞く場面では机上に物を置かない。

□学習形態
・活動のバリエーションが多い。
・話を聞くとき、発表するときの姿勢。

□指示の明確化
・指示が簡潔な言葉で具体的。
・一つの指示で一つの動作（作業）。
・無駄な話や不必要な説明がない。

□見通し・確認
・活動時間や終了時刻を明確にする。
・既習事項や参考資料の提示がある。
・偏りや落ちのない机間指導。

□視覚情報
・板書の書き方、資料の貼り方の工夫。
・聴覚情報と視覚情報の併用。
・拡大図、具体物、視聴覚機器等の活用。

□教材・教具
・課題理解のために一人１セットを準備。
・提示の順序とタイミングの工夫。

4　校長授業による実演

紙面で情報を伝えたり、授業分析で話し合ったりすることも重要であるが、実際のユニバーサルデザインの授業を見ることも、とても意義あることと考える。そこで、ほぼ毎年度、卒業を間近に控えた６年生の子どもを対象に「大切なもの」というテーマで校長自らが道徳の授業を行っている。

子どもの興味関心をひきつける導入を設定したり、掲示物を多く用意して視覚的にわかりやすくしたりして、ユニバーサルデザインの授業にすることを心がけている。道徳なので、正解を導いたり追究したりする内容ではないが、全員が参加し、価値の内面化が図られるような展開や資料提示ができるようにしているつもりである。

次の文は、子どもの感想である。

> 校長先生の授業は、黒板にはり紙のようなものをはっていて、わかりやすかった。校長先生は今までにいろいろなことをしてきたのだなと思った。
>
> （H22年度卒：男子）
>
> 校長先生の授業を２回も受けさせてもらってうれしいです。今日の授業はたくさんの資料を使い、本当にあった話などをしてもらえて、とてもわかりやすかったです。十人十色について一人一人個性があっていいなと思いました。六の二の中でもいろいろな個性があって～。
>
> （H23年度卒：女子）
>
> 校長先生の人生を通しての体験談をベースにした、とってもわかりやすい授業でした。わかりやすい資料で、障害者も人間だということが、もっと頭に入ってきました。そして、そのような障害のある人も自由に過ごせる様に、世の中のバリアをどんどん無くしていきたいです。
>
> （H24年度卒：男子）

授業を行うに当たっては指導案を作成し、全教師に配付して、誰でも参観できるように設定している。

5　周知を図るために

校長職としてではないが、ユニバーサルデザインの授業を広く知らしめる必要性を感じ、自分が会長を務めている「さがみ虹色ネット」という研究会で、ユニバーサルデザインの授業の先駆者を講師として招聘し講演をいただいている。

平成２２年度は都立港特別支援学校教諭の川上康則氏、平成２４年度は日野市立日野第三小学校長の京極澄子氏をお招きして、ユニバーサルデザインの授業の最新の理論や具体

的な実践等についてお話しをいただいた。参加者の多くが相模原市内の教員であり、浸透が図られたと考えている。

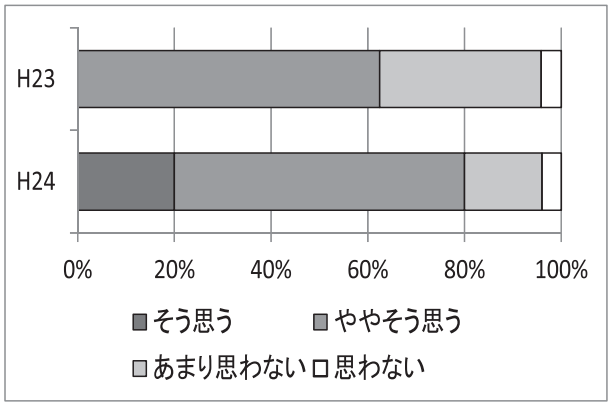
次の文は、昨年の参加者の感想である。

・本年度から校内研で「授業のUDの視点を取り入れて」というテーマで研究を始めました。手探りの状態で取り組んでいますが、今日の講演会が大変参考になりました。ありがとうございました。
・「ユニバーサルデザインの授業」というと、新しい取り組みのように考えてしまうが、先生のお話をうかがいながらわかる授業の工夫がこのことなのでハードルが低くなりました。よい授業をするために何ができるか、どこから手を付けてよいか迷ってしまうので、何人かの子をイメージしながら進めていきたいと思います。学校に持ち帰り伝達していきたいと思います。ありがとうございました。

Ⅳ　成果と課題

校長は日常的な授業者ではない。日々、授業を行うのは学級担任を始めとする先生方である。その先生方が授業力を高められるように、ユニバーサルデザインの授業について紹介し、説明し、実践しながら広めてきたつもりであるが、その成果を評価するための指標やツールは明確とはいえない。

これまでも、学校経営の重点目標の一つとして、「ユニバーサルデザインの授業の推進」を設定し、年度末に教職員の教育反省でその評価を行ってきた。前任校では、２年間の取り組みで、教育反省アンケートの「ユニバーサルデザインの授業の視点を意識して授業を行ったか」という質問に対して、「前年度に比べて、意識的に取り組んだ。」と回答する教師が増えたという結果が出された。



また現任校でも、年度末に実施している保護者の「学校運営についてのアンケート」でも、「授業が楽しく分かりやすいか」を尋ね、約８５％の保護者から肯定的な評価が出されている。

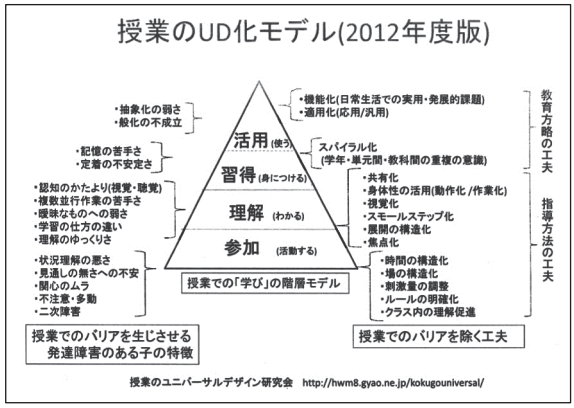
しかし、最も重要なのは、実際に授業に参加している子どもの実感やテスト等の得点の推移を探ることである。そのためには、継続的な取り組みと明確な評価規準を設定することが不可欠であると考える。

また、昨今、ユニバーサルデザインの授業は、ブームのような様相も呈している。特別支援教育の充実の視点からは、重要なことであるが、何でもかんでも「ユニバーサルデザイン」ととらえる傾向も見え始めている。

例えば、「黒板の上の壁にはなるべく掲示物は貼らない方がよい」ということが言われている。確かに、人の顔やきらきら光る飾り等は刺激が強く、それにとらわれて授業に集中できない子どももいるであろう。しかし、学校目標や学級目標、「声のものさし図」等は、貼った直後は気になるが、時間が経つにつれて壁に同化し、ほとんどの子どもは気にならなくなるものである。

今、ユニバーサルデザインの授業の流れを見ていると、そのような学習環境の調整的な部分と、学習内容の理解の工夫の部分が一緒くたに考えられてしまっているところが見受けられ、それが「ユニバーサルデザインの授業がよくわからない。」という意識をもたらしている状況にもつながっている。

前述した、「授業のユニバーサルデザイン研究会」は、そのような課題を整理して、昨年度「授業のＵＤ化モデル（2012 年度版）」を出している。それを参考にすることで、環境調整と内容工夫の部分や方向性が明確になると思われる。



出典「授業のＵＤ研究会ＨＰ」

Ⅴ　おわりに

ユニバーサルデザインの授業は、不可能を可能にする魔法の授業法ではない。ある学校の研究によれば、学校一丸となってユニバーサルデザインの授業に熱心に取り組み「わかる授業」の実現を目指したところ、成績上位と中位の子どもの成績は向上したが、下位の子どもたちは伸びなかったという結果が出たそうである。

現実的には、通常の学級の中に、授業の内容や展開の工夫だけでは理解が難しく、個別対応が欠かせない児童もいる。その場合は、校内の支援体制を工夫する必要がでてくる。

しかし、ユニバーサルデザインの授業は、「わかりやすさ」を追究している。子どもにとって「わかる」ことは学びの喜びを味わわせるとともに理解の定着を図り、自信と次の課題への意欲をもたらし、結果的に学力向上を期待できるものである。

冒頭で紹介した神奈川県公立小学校長会のアンケート調査でも、基礎・基本の確実な定着が難しく努力を要する子どもへの対応については、人的加配対応の次に授業者の指導方法の工夫を実施している学校が多い（６２％）というデータが出されている。

また、本校は通常の学級の担任は１３名であるが、教職経験１０年未満の教員が１０名で、７７％にあたっている。相模原市全体でも教員の若返りが進んでおり、授業力向上は命題となっている。校内のベテランといわれる教員の豊富な経験を伝承するとともに、日々の授業実践に活かせるようなを授業改善を図らなければならない。

ユニバーサルデザインの授業は、そのための一つの切り口と考えている。これからも、子どものわかる喜びを引き出すような授業力の向上に向けて、校長としての取り組みを地道に続けていきたい。

参考文献

①神奈川県公立小学校長会
「平成２４年度研究調査報告書」2013 年 21～22 頁
②「障害者の権利に関する条約」2013 年
③「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」文部科学省　2012 年
④全日本特別支援教育研究連盟編
佐藤慎二・漆澤恭子責任編集
「通常学級の授業ユニバーサルデザイン」
日本文化科学社　2011 年　37～38 頁
⑤授業のユニバーサルデザイン研究会　編著
「授業のユニバーサルデザイン Vol. 1 」
東洋館出版社　2010 年　3 頁
⑥堀裕嗣著
「一斉授業の 10 の原理・100 の原則
～授業力向上のための 110 のメソッド」
学事出版　2013 年